翻訳　「イタリア伝説」

原　求作
上智大学名誉教授

筆者は，2014 年に，上智大学出版から『キリール文字の誕生』を上梓しました．キリール文字の誕生に関する重要な資料のひとつに,「イタリア伝説」と一般に呼ばれるラテン語の文献（Vita cum translatione S. Clementis）があることは，この本の前書きに述べた通りです．以下は，この「イタリア伝説」の全訳です．«Н.В. Ястребов, Сборник источников для истории жизни и деятельности Кирилла и Мефодия, апостолов славянских»に収録されたテキストを底本としました．

コンスタンティノス（キリール），メトディオス（メフォージイ）は，西暦 863 年から 867 年にかけてのモラヴィア滞在の後，ローマに向かいます．そのさい，キリスト教の初期聖人の一人クレメンス[1]の遺骨を携えていた，と言われます．コンスタンティノスは，モラヴィア伝道以前にハザール伝道の任にあたっており，そのさいに，この聖人の遺骨を発見していました.「イタリア伝説」は，この聖遺骨発見の経緯を叙した短い文章で，ローマでコンスタンティノスの後見人の立場にあった司祭アナスタシウスが記し，それをもとに司祭ガウデリックが書き直したものとされています．後年ロシアで発見された文献（スラヴ語）の中にもほぼ同じ内容のものがあり，後者は前者をもとにして書かれたと推測されています.「イタリア伝説」は，兄弟の正伝ともいえるパンノニア伝説（スラヴ語），二人の後継者であるオフリドのクリメントの生涯を叙実の中心においたブルガリア伝説（ギリシャ語）と並ぶ，兄弟およびそれに関わる人たちに関する数少ない第一次資料のひとつですが，書かれた過程について，詳細がわかっているわけではありません．教皇庁には，正教会からの使者である兄弟に反発する勢力から二人を守る必要があったとされますし，まったく違う人物が，50 年以上も前に，似たような経緯で同じ聖遺骨を発見するという内容の「種本」ともいえるような資料も存在していますので，遺骨発見の話そのものが，後に作られたフィクションであったと考える研究者もいるようです．
パンノニア伝説は，当時としては「大部の書」といっていい書き物ですし，ブルガリア伝説は数多くの引用を含んだ修辞的で難解なギリシャ語で書かれています．イタリア伝説はこれに対して，平易で分かりやすいラテン語を使って記されたものです．聖

[1] クレメンスの生涯についてはウォラギネの『黄金伝説』（人文書院，1979〜1987 年）第 4 巻に詳しく述べられています．ただし，黄金伝説そのものは 13 世紀中葉になったものとされ，創作による部分も多いと思われます．

ロシア語研究会木二会年報『ロシア語研究』第 31 号（2021），87-93.

遺骨発見の経緯が主題ですから，コンスタンティノスの人生にはほとんど触れられていません．コンスタンティノスのハザール訪問の主要な目的であったはずの宗教論争についても，最初のところに少し言及があるだけです．上記 Н.В. Ястребов の著書では，全体が 12 の部分に分けられていますので，以下の翻訳では，その区分をそのまま使いました（ラテン語の文献ですので，固有名詞はラテン語式の表記ですが，必要に応じて，ギリシャ語式の表記に直して，その音を受ける形にしました.「コンスタンティヌス→コンスタンティノス」「カザール→ハザール」など）.

なお，未訳のブルガリア伝説の翻訳も，順次進めようと考えています.

【１】

ミカエル[2]が新しきローマ[3]の皇帝だったとき，一人の男がいた．高貴の生まれで，テッサロニキの産,名をコンスタンティノスといった.幼い頃からその天稟世に聞こえ，正しく哲人と呼ばれていた．成人すると彼は，両親によって帝国の首都に連れてこられた[4]．彼は加えて，おおいなる宗教心と英知を持っており，神の御心によって，司祭の職を与えられたのである.

このとき，くだんの皇帝のところに，ハザールの使者たちがやってきた．彼らは正しくキリスト教の信仰を教えることのできる学ある者を自分たちに送ってほしいと乞い願ったのであった．そして，ユダヤ人とサラセン人が彼らを自分の信仰に引き入れようとしている，と付け加えた．我々は自分たちをどのような方向に向けるべきかわからないので，我々の信仰と救済に関して，全キリスト教世界を代表する最高の皇帝に助言を求めることに決めた．あなたたちの信心と友情におおいに期待を寄せて，と彼らは言った．そこで皇帝は総主教と相談し，くだんの哲人を呼んだ．そして，彼らの使者たちと自分たちの使者たちとともに，大いなる敬意をもって，哲人をそこへ送った．彼の英知と雄弁に全幅の信頼を寄せて.

【２】

コンスタンティノスは，すぐに必要なものをすべてそろえて出発し，ケルソネス[5]に到着した．ここはハザールの領土に近く，境を接している場所だった．ここに，かの地の言葉を習得するために少し滞在した．このとき，神のお告げがあった．神はいまや，聖クレメンスの遺骨という貴重な宝を，信仰篤き者たちに開示することを決められたのである．くだんの男は，あくなき探究者のごとく，当地の住民から，聖クレメンスの遺骨について，天使の手によって建てられたという教会について，彼の棺について，文字で伝えられてきたもの，口承で伝えられてきたものを通じて，熱意をもって，また巧みに，知ろうとしたのである．すべての人が，現地人だけでなく，さまざ

---

2 ビザンチン皇帝ミカエル 3 世（在位 842 年～867 年）.
3 ビザンチン帝国のこと.
4 コンスタンティノスがコンスタンティノープルを訪れたのは，父親の死後とされている.
5 現在のセヴァストーポリ.

まな種族の外地の人も，問われたことについてまったく知らないと告白した．長い時間がたったがゆえに，また住民の罪咎と，その無関心によって，引き潮によってひきおこされたあの奇跡[6]は，かの聖人の受難の歴史の中にたしかにあったのであるが，いまや跡形をなくしてしまった．海は過去の場所を波で洗い流してしまった．さらに，夷敵の侵入が度重なったために，その場所は荒れ果て，教会も打ち捨てられ，荒廃し，この地の多くの部分は見捨てられ，人の住まない場所になってしまった．それで，聖なる殉教者の棺も，その遺骨もろとも，波にさらわれてしまった．

【３】

この答えにいたく驚き，悲しんだ哲人は，祈りをおこなった．人から知ることのできなかったことが，先の聖人（クレメンス）の徳にかんがみて，神の啓示によって明らかにされるように．ゲオルギオスという名のこの町の大主教を，聖職者たちと一部市民とともに招いた．天からの啓示を期待して．さらに，この殉教者のなしたことについて，いとも尊き殉教者のなした奇跡の数々について伝えつつ，長く打ち捨てられていたこの上なく貴重な宝を探し出し，これを神の助けによって世に出すことに着手するよう，その弁舌でもって，多くの人に訴えた．一月三十日，海の穏やかな日に，キリストの導きのもとで先の哲人は，大主教と高位聖職者，そして，いくたりかの市民たちとともに，船に乗り，出航した．大いなる献身の思いと勇気でもって，歌い，祈りながら航海し，聖なる殉教者の遺骨があると考えられている島に到着した．島を四方からまわり，多くの明るい光で照らし，貴重な宝を飽くことなく探し続け，宝が眠っていると考えられる塚を執拗に掘り返した．

【４】

聖なるものへの願望を長く持ち続け，神の慈愛におおいに期待を寄せながら，彼らは作業を続けた．そうすると，神の恩寵あって，輝かしい星のごとくに，不意に，くだんの殉教者の遺骨のひとつが現れたのであった．この情景を見て，皆は限りない興奮に包まれ，特に強いられることもないまま，大地を懸命に掘り返した．すると，聖人自身の頭蓋が現れた．皆がいかなる声を天にあげたか，いかなる称賛と感謝のふるまいを，あふれる涙とともに天の神にむかって送ったかは，想像することもできないし，まして描写することもできない．聖なる遺骨が発見されたこと，そしてあたりにいとも妙なる香りがひろがったことで，みなは喜びにみたされた．名状しがたい喜びがあふれ，自らが天国にいるかのごとく感じられたのである．聖なる遺物の目立たぬ部分が少しずつ，ときをおいて現われ，ついに，探していたものすべてが姿を現した．最後に，殉教者が海に投げ込まれたときの錨も現れた．

[6] クレメンスが殉教の後，海に沈められた後，信者たちが祈ると，潮が引き，聖者の遺骸が現れた，と伝えられる．

【５】

みなは，このような神の恩寵があったことで，おおいなる喜びにみたされ，その場でコンスタンティノス自身による秘儀をおこなった後，聖なる人（コンスタンティノス）が自分の頭の上に聖人の遺骨を入れた聖櫃をのせて，みなの歓喜にともなわれて，それを船に運び込んだ．その後，首都グロリア[7]に，讃美歌を唱え，おおいなる称賛の声をあげながら，運んだ．町が近づいてくると，町の長である貴人ニケフォロスが多くの人々とともに出迎え，聖なる遺物を崇め，おおいなる感謝の態度を示しつつ聖櫃の前にたって進み，喜びとともに町に急いだ．コンスタンティノスは，多くの人々の喜びの叫びとともに，聖なる遺体が取り戻されたことに感謝し，みなの前で聖なるものの発見について語った．夕暮れになると，人があまりにやってくるものだから，前に進むことができなくなり，町の近くにある聖ソゾン[8]教会に細心の注意を払っておさめ，そこから聖レオンティオス[9]教会に移した．翌朝，多くの市民が集まり，聖なる遺物が入った聖櫃を手に入れ，おおいなる称賛とともに町をめぐり，大聖堂[10]にいたり，そこにうやうやしく聖櫃をおさめ，やっとみなが家路についた．

【６】

くだんの哲人はその後，その地を出，目的の地（ハザール）にいたった．すべての人の罪を贖うものである神について説き，その雄弁と，その弁舌の理性的なることによって，みなを誤謬からただし，サラセン人やユダヤ人の蒙昧から人々を救ったのであった．人々はおおいに元気づけられ，キリストの教えを授けられ，心に刻み，全能の神とその使者，哲人コンスタンティノスに感謝を捧げた．さらに，ビザンチン皇帝に対して，おおいなる敬意をもって手紙を送った．コンスタンティノスが，その情熱でもって，彼らを正しきキリスト教の信仰に引き戻し，そのことによって，彼らがビザンチン皇帝に服属し，彼に忠実であることを確実なものにしたからである．彼らは哲人をおおいなる敬意とともに送り返し，最大限の報償を与えようとしたけれども，哲人はまさしく哲人ゆえ，これらを辞退し，これらの報酬の代わりに，ある限りの捕虜[11]を自分とともにすぐ帰還させてほしいと願った．この願いはすぐ容れられた．

【７】

哲人がコンスタンティノープルに帰ると，モラヴィアの王ロスティスラフが，ハザールの地で哲人がおこなったことを聞き知って，自分の土地の人たちにも同じことを

---

[7] ケルソネスはこの時代，東ローマ帝国の支配下にあったが，一定の自治を認められていた．グロリアはその州都のような場所だったと考えられる．

[8] 紀元 3 世紀ないし 4 世紀のシチリアの殉教者．火刑に処されたとされる．その名を冠した教会がどこにあったかは不明．

[9] 紀元 1 世紀のローマの殉教者．その名を冠した教会がどこにあったかは不明．

[10] ケルソネスの主教座教会の聖堂と思われる．どこにあったかは不明．

[11] ビザンチンとハザールは交戦状態にあった時期があり，ハザールには多くの捕虜がとらえられていたという．

してもらおうと決心し，くだんの皇帝に使者を送り，次のように告げた．我々の民は偶像崇拝を捨て，キリストの教えに帰依することを切望する，と．民に読むことを教え，完全な秩序を教えてくれるような師を，私たちは持っていない．民に信仰と，神の法と，正しき生活を教えてくれる能力のある人をこの国に送ってほしい．この願いを認めた皇帝は，さきの哲人に自分のもとにくるよう言った．そして，彼を，その地，すなわちスラヴの地に，兄であるメトディオスとともに送った．旅に必要なものを十分に与えて．神の采配あって，彼らはその地に到着した．その地の住民は，彼らの到着を知り，おおいに喜んだ．聖クレメンスの遺骨を彼らが無事に運んだことを知り，かつ，くだんの聖人によって福音書が自分たちの言葉に訳されたことを知ったからである．彼らは町の外まで出迎えに出て，称賛と喜びをもって彼らを迎えた．一行はただちに熱心に仕事に取り組んだ．子供たちに文字を教え，キリスト教の正しき教義を講じ，民の中にみつけたさまざまな誤謬を把握し，彼らの言うところの中にある間違いをただし，災いをもたらす彼らの土地から，さまざまな欠陥を洗い出し，根絶やしにし，正しき神の教えを伝えたのであった．彼らはモラヴィアに四年半とどまり，その地の人々をキリスト教の信仰に導き，伝道の仕事に必要と思われる文書を残した．

【８】

これらすべてのことを聞くと，教皇ニコラウス[12]は，コンスタンティノスによってもたらされたものにたいへん喜び，使徒の手紙（教皇書簡）をもって彼らを招待した．この知らせを受け取った彼らは，たいへん喜び，使徒たる教皇による招待という恩恵を与えてくださった神に感謝した．やがて旅路についたコンスタンティノスは，自分の弟子たちのなかから，司教たる栄誉を得る価値があると考えられる者を選び，同行させた．そして，数日後[13]，ローマに着いた．

【９】

ところが日を経ずして，教皇ニコラウスが神に召された．そこで，ローマで教皇職を継いだハドリアヌス[14]が，くだんの哲人が，苦労の末発見した聖クレメンスの遺骨を持参したことを聞き及んで，たいそう喜び，聖職者，市民ともども町の外まで彼を出迎えに出て，おおいなる敬意とともに彼を受け入れた．聖なる遺骨のあるところで，神の恩寵によって，驚くべき奇跡がおこりはじめた．どんな病にとりつかれている人でも，聖なる遺骨に願いを入れると，たちどころに癒えるのであった．使徒たる教皇と全ローマ市民は，神に感謝と最大の称賛を与え，歓喜し，長い期間ののちに，神が

---

[12] ニコラウス 1 世．在位 858 年～867 年．

[13] 兄弟のモラヴィア出発は 867 年春．ヴェネチアを経てローマに到着したのは同年末．この記述には誇張がある．原文 post aliquos dies は через несколько дней の意だが，aliquos は不定代名詞なので，「一定の時間をへて」という意味かもしれない．

[14] ハドリアヌス 2 世．在位 867 年～872 年

聖なる使徒であり，聖ペテロの後継者である人[15]を，しかるべき時期に，自らの座に受取り，ローマの町ひとつのみならず，その地域，またローマ帝国全体をそのしるしと徳とで照らすことを，許されたことを喜んだ．くだんの哲人のなしたおこない，その貢献に謝意を表し，コンスタンティノスとメトディオスを司教に叙し，彼の他の弟子たちを副司教ないし輔祭に叙した[16]．

【１０】

哲人，つまりコンスタンティノス自身は，自分の最後の日が迫っていることを感じ，ローマ教皇に許可を求め，キュリロスという名を自らに選んだ．この名は天から与えられたものだと言って．そして四十日後の三月十七日，神に召された．ローマ教皇自身が，ギリシャ人[17]とローマ人すべての聖職者に，彼の葬送に，聖歌と歌唱をもって参加し，使徒を送るのと同じように，その埋葬に敬意をささげることを要請した．

【１１】

前に述べた彼の兄メトディオスは，ローマ教皇のところにいき，弟の衣鉢を継ぎ，言った．次のように言うことが至当であり，必要であると私は考えます．私たちが家を出て，神の助けを借りて，自らの仕事にとりかかったとき，母はおおいに嘆いて次にように言いました．私たちの一人が，家へ戻る前に神に召された場合，死んだ兄弟を，残った一人が自らの修道院に戻し，しかるべき敬意をもってそこに埋葬しなさい[18]，と．教皇様には，私のなすべきことを許していただきたい．母の願いに反することをさせないでいただきたい．教皇には，これは少しく困難なことであったけれども，このような願いをはねつけることは，正しいことと思われなかった．そこで，亡き人の遺骨を丁寧に琥珀の箱に納め，自分自身のしるしを刻んで，六日後にメトディウスに出発の権利を与えた．ローマの聖職者たちは，司教，枢機卿，町の有力者たちと話し合い，教皇のところにきて，言った．ローマ教皇およびローマ教皇庁が，その人の力でかくも貴重な宝が我々の町にもたらされた，そして神が，自らの恩寵でもって長い過程を経て我々のもとに運ばれた，このような人を，どのような事態が出来したにせよ，他の地へ移してしまうことは，至当ではないと考える．むしろ，敬意をこめてここに葬ってさしあげることが正しいであろう．というのは，このような輝かしい人物は栄えある町に埋葬の場を持つのがよいと思われるからである．教皇はこの考えを受け入れ，サン・ピエトロ寺院の，自らが記念した場所に納めることを命じた．

---

[15] クレメンスは使徒ペテロを知る人物だったとされている．第4代教皇の地位を与えられている．

[16] 原文 episcopus, prosbyteros, diaconos という語が使われる．prosbyteros の立場はよくわからないが，前から順番に「司教」「副司教」「輔祭」とした．

[17] 当時ローマにはコンスタンティノープルからの亡命者をはじめ，多くの東ローマ帝国住民が滞在していた．

[18] 兄弟の母は，兄弟のどちらかが死んだ場合，残った一人がその遺骸を故郷に持ち帰ることを望んでいた，と言われる．

【１２】

メトディウスは，自らの願いが却下されたことを知り，次のように言った．私の願いは認められませんでした．ならばせめて，弟の熱意とおおいなる努力で発見され，ここに運ばれた聖クレメンスの名を冠した教会に，弟を納めさせてください．教皇はこの訴えを受け入れて，聖職者たちと多くの市民が集まって，大きな喜びと，おおいなる敬意をもって，教皇自身がその中にキュリロス自身の遺骨を納めた琥珀の箱を，彼のために聖クレメンス教会に作られた場所の，聖壇の右手に，納めた．この場所で大いなること，驚くべきことを，その名（神の名）をたたえ，その栄光を歌うために，使徒たちの貢献と祈りゆえに，なされた神に，最大限の敬意を払い，聖歌を歌って．神に永遠の栄光あれ．アーメン．